
SILVERWORLD

白銀の魔導師

坂口 力也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SILVERWORLD

白銀の魔導師

【Nコード】

N2748D

【作者名】

坂口 力也

【あらすじ】

人間と龍人の存亡をかけた戦争。その戦争によって少年ヴァン・ダムホープが成長していく様子を描いた物語。

第一話 戦争

薄暗い森の中、一人の少年が立っている。

少年の手には赤く血塗られた短剣、きれいな黒髪は返り血を浴び、周りには無残な死体が転がり新緑の大地を紅く染めあげていた。

「戦争なんだ…。」

そんな冷酷な言葉とは裏腹に、少年の漆黒の瞳からは一筋の涙が零れている。

そして少年は今日の朝のことを思い出した。

『人類繁栄』『龍人支配』などと言う大義名分を掲げた大人達が勝手に始めた人間と龍人の戦争。

戦うのは若い兵ばかり。

戦争を始めた馬鹿なじいさん達は部屋で指示を出すだけ。

火薬、薬品、血のにおい。

いつまでも終わらない悲しみの連鎖。

戦火は広がり続け、世界の10分の1はすでに焼け野原だ。

犠牲者の数だってハンパじゃない。

俺の友達も…。

敵の子供も…

敵でも殺すのはやはり辛い。

・

でも…

・

『…戦争なんだ…』

そう言っつていつも説得してた自分がいる。

…それは…本当に…

「ヴァン・ダムホープ！」

ガバツ。

突如名前を呼ばれてヴァンは仮眠室の布団から飛び起きた。

「…夢、か…」

ヴァンは漆黒の目を開いて布団から起きだした。

「夢じゃない！早く支度しろ！作戦が始まるぞ。」

ヴァンに命令しているのは国軍中佐であり、今回の作戦の隊長、そして義理の兄であるライト・フローパーだった。

まだ若く高い頭脳を持ち何よりハンサムだ。

「ごめんなさい。兄さ…、じゃない隊長」

「…お前は隊の要なんだ。しっかりしてくれよ。ダムホープ少尉。」

それだけ言っつてライトは仮眠室を出ていった。

ここ作戦本部はロンドンから海を超え5000キロ離れた場所にある。街と違いまだ緑がある数少ない場所だ。

仮眠室は地面むきだしのテントの中にベットを置いただけの粗末な部屋。

「…俺も早く行くか。」

ヴァンは素早く荷物を鞆に入れ、部屋を出て行った。

ヴァンは素早く荷物を鞆に入れ、部屋を出て行った。ヴァンは軍人だが自分の意思で軍に入ったわけじゃない。

ヴァンは国軍西地区本部の門の前に捨てられているところ、ライトの父親で、国軍西地区本部長であるアレン・フローパーに拾われ育った。

フローパー家は代々、将軍職を務める家柄で、ヴァンも小さな頃から将校になるべく英才教育を受けていた。

そして15歳となった今当たり前のように軍に所属している。

出撃は今回の作戦でちょうど20回目である。

出撃準備室には、ヴァン以外全員そろっていた。

「遅いぞ。ダムホープ少尉。」

「ごめんなさい。」

「…まあいい。今回の作戦の最終打ち合わせだ。」

隊員全員がライトに視線を向ける。

「この森の中に龍人の里があると情報が入った。先遣部隊を派遣したが連絡が途絶えている。龍人がいる可能性は高い。探し出して龍人を始末、もしくは捕まえろ。質問は？」

誰も手を挙げない。

「無いな。皆スリーマンセルを組み出撃だ。全員死ぬなよ！」

ヴァンは隊長のライトと新米兵リチャードと組み森へ入っていった。

「…しかし広いですねこの森…」

探索を初めてから3時間後リチャードが口を開いた。

（…確におかしい。いくらなんでも広すぎる…。…まさか）
「…魔法か！？」

ライトは思考を巡らせた。

（時空系ならもつと空間が歪むだろう。と言う事は…。幻術か！）

「ヴァン！レベル4を使い！」

「えっ！なんで？」

ヴァンは飲んでいた水瓶を落としてしまった。

「話を聞いている！…まあいい。…恐らく今私達は敵の術にはまっ

てしまっている。」

ヴァンは納得したように頷いた。

「ああ、なるほど。わかったよ。」

そう言うヴァンは地面になにやら書き始めた。

「これは…魔法陣ですか？」

リチャードが驚いたように声を出した。

「ちょっと違うかな。これは召喚陣だよ。」

「召喚陣…ですか？」

「そう。まあ魔法陣と同じようなものだけだね。ちなみにレベル4
つてのは召喚獣の強さね…よしっ出来た！」

「そうか。さっそく始めてくれ。」

ヴァンは軽く頷くと陣の上に手をかざした。

ヴァンは軽く頷くと陣の上に手をかざした。

すると陣の中央から青い光が発生し、やがて光が集まりヴァンと同じ位の大きさの球体に形を変えた。

「call『ウルフエン』！」

ヴァンがそう叫ぶと光の球体のはじめ、全長1m位の銀狼^{ぎんろう}が現れた。

「久しぶりウルフェン。」

「今回は何の用だ？」

「ここの幻術を解いて欲しいんだ。簡単だろ？」

するとウルフェンは辺りを見回し始めた。

「ほう、これは強力な幻術だ。これだけのものをトラップなんかに
ではしない。」

「どう言う事？」

「術者が付きつきりで力を込め続けなきゃいけないって事さ。」

「じゃあ…」

「敵さんのアジトが近いつて事だろうな。」

「そうか。じゃあ解くのに1時間位はかかる？」

ヴァンがそう聞くとウルフェンはフン、と鼻で笑った。

「なめんなよ。…3分だ。」

そう言うとうルフェンは早速行動を開始した。

「あの、ウルフェンってなにしてるんですか？」

今まで静かに様子を見ていたリチャードが尋ねてきた。

「ああ。ウルフェンは鼻で幻術の核を探してるんだよ。核を破壊すればどんな幻術だって簡単に破壊できる。」

ヴァン達がそう言っているうちに、ウルフェンが核を見つけたようだ。

「さすが、早かったね。」

核は木でできた不思議な形の像だった。

「当たり前だ。じゃあ俺は帰るぜ。」

そう言うとウルフェンは一瞬で姿を消した。

「ヴァン、リチャード、核を破壊するぞ！敵が近くにいるはずだ。気をつける！」

ライトの言葉でヴァンとリチャードは細身のロングソード（軍支給）を構えた。

「よし、では破壊する。」

ガッ！

核は鈍い音をたて砕けた。

「やった！成功だ！」

だがリチャードがそう言って辺りを見回すとそこには…

血塗れで倒れている仲間の姿があった。

「ギルダ！ゼム！お前ら！」

ライトが慌てて駆け寄る。

「しっかりしろ！おい！ギルダ！」

「…ウツ！…」

まだ辛うじて息はあるようだ。だがあの傷では…。

「何があった！」

「き、気をつける…！ここは…敵のアジトの中だ…。」

「…その通り。ようこそ愚かな人間供よ！」

ライト達は…すでに敵達に囲まれていた。

第二話

そこは薄暗い森。だがどこか神秘的な場所。

今の時代こんな自然が残っている場所は少ない。

「美しいだろ、人間。昔はこんな自然が多くあったものだ。我ら龍人の森が。」

ヴァン達に向かって龍人のリーダーらしき者が言った。

その声は懐かしむようにも悲しんでいるようにも聞こえる。

「…だが貴様ら人間が森を、我らの里を破壊していった!」

龍人は突然声を荒げ、目付きが鋭くなった。

「貴様ら人間共は、ここに立ち入る事自体許されんだ!」

そう言つて龍人は背中の翼を広げる。

それが合図だったのか他の4人の龍人達が飛び掛かってきた。

ライト達はまともに戦えるのが3人。さらにその中の一人は新人であまり期待できない。

「ヴァン!! 結界を!!」(今からでは間に合わないのは分かっている。だがそうするしか…。)

龍人達がどんどん近づいてくるのがわかる。

ライトは一瞬死を覚悟した。

だが

「諦めんのははやいだろ！」

ヴァンがそう言うのとライト達の周りに風が起こる。

「これは…『ウィンド』！？」

『ウィンド』はもとも初級の攻撃魔法だが、ヴァンはそれで壁を作りうまく防御魔法として発動したのだ。

「結界より早く作れるんだ。あんま保たないけどね。」

ヴァンはまだあきらめてはいない。

（そうだったな。簡単に諦めちゃいけないよな。）

ライトは冷静を取り戻したようだ。

「…すまないヴァン。…だがこの状況ではどうする事もできん。一時撤退するぞ。」

ヴァンは少し嫌そうな顔をしたがさすがに部が悪いのはわかってい

「わかったよ。兄さ。」

だがヴァンが言い終える前に風の壁が崩壊した。

「我らをなめるなよ！人間共！」

そう言うとき龍人はライトとリチャードに向かって火球を放つ。

2人はそれをなんとか避けることができた。

だがギルダ達は動けず炎に飲み込まれてしまった。

「畜生！」

ライトは空中で体の向きを変え、龍人と向き合う。

「食らえ！龍人！『ホワイトランス』！」

そう叫ぶときライトの手から無数の白い雷槍が放たれる。

それは龍人目掛けて飛んで行き、4人は避けたが逃げ遅れた一人の龍人を貫いた。

「ちっ！よくも人間のぶんざいで！」

龍人の怒の声が聞こえた。

「朽ち果てろ！人間！」

龍人は再び口から火球を放つ。

ライトとリチャードは空中で身動きがとれない。

そして……

… 2人は炎に包まれた。

「兄さん！！リチャード！」

ヴァンは必死にライト達を助けようとした。

だが火の勢いが強すぎて近付くことができない…。

それを見ていた龍人達が口を開いた。

「諦める人間。あれはもう助からない。」

龍人達は満足そうに笑っている。

『全員死ぬなよ』

ヴァンの頭に出発前のライトの言葉が思い出された。

ライトとの小さい頃からの記憶と共に…。

「…許さない…。」

ヴァンは炎を見つめて呟いた。

「なんだと？」

「許さない！」

「何を言うお前らだって我らの同胞を…」

「許せない！！」

そう叫ぶとヴァンから凄まじい魔力が漏れだし、体を覆っていく。

すると、みるみる髪と瞳がきれいな黒から白銀へ変わり始める。

さらに背中からは服を突き破って銀の翼が現れた。

「なっ！なんだそれは！」

龍人は驚いたように叫んだ。

そして次の瞬間

龍人の3人が銀の炎に包まれ一瞬で灰になった。

「なんだと！？どう言う事だ！本来火を司る我ら龍人がやかれるなど…！」

龍人の頭に一人の存在が浮かび上がった。

…知っている。あの銀の炎を。あの凄まじい力を。

『人間と龍人は共に歩いて行ける』

いつもそう言っていた龍人。

同族でただ一人の白銀の龍人。

唯一龍を焼けるほどの炎を持っていた龍人。

《アルバ・ハートラル》！！

「…だがあの方は1000年以上前に死んだ伝説の龍人だ！生きて
いるはずが無い！それに人間では無い。龍人だ！」

だが目の前にいるのは白銀の炎と凄まじい力を持つ人間。

「どう言う事だ！人間！」

だがそんな龍人の話などヴァンは聞こえていないように、手のひら
から白銀の火炎が放たれた。

その炎は最後の龍人を一瞬包みこみ、灰にした。

それから何時間がたっただろうか…。

ヴァンは自分がわからなくなっていた。

知らない力、姿。

人間なのか龍人なのか…それともただのモンスターなのか…。

「兄さん…。」

ヴァンは既に白銀の姿でなく元の姿に戻っていた。だが手には短剣を持ち黒い髪には返り血をあびている。

そしてヴァンの足下には無残な龍人達の死体。

ヴァンは一人で龍人の里を全滅させてしまった…。

だがその中にはまだ子供の龍人、年老いた龍人もいた。

ヴァンは命令でもない限り殺しなどしない。むしろ敵でさえ助ける時もある。

「戦争…なんだ…。」

焦点が合っていない瞳からは涙が流れている。

絶望の瞳。精気も覇気も無い。

「…それは違うぞヴァン・ダムホープ。」

突然後ろから声がする。

ヴァンが振り向くとそこには何人もの黒いフードをかぶった者達がいた。

「…誰だあんたら…。この里の奴、じゃないな。なんで俺の名前を知っている？」

すると中の一人の男が口を開いた。

「君の事はよく知ってる。14歳で入隊。15歳にして異例の少尉昇進の神童。そして…」

男は一瞬口を閉じてから続けた。

「…白銀の龍人 アルバ・ハートラルの細胞を受け継いだ人間。《A系ストライダー》ヴァン・ダムホープ。」

「《A系ストライダー》？なんだそれは。お前らなんなんだ？」
わからない事が多過ぎる。

ヴァンはだんだんイライラしてきた。

「ああ。紹介が遅れたね。私達は戦争反対派の人間、龍人が集まって結成した組織。」

ヴァンは戦争反対派の人間は何人も見ている。

だが龍人と組んでいる組織は初めて見た。

「我らの指導者は龍人だ。…会った事は無いがな。その方は我らに力を残しておいて下さった。《ストライダー》と言う力を。」

「《ストライダー》って俺か？」

「まあそう言う事だ。《ストライダー》とは人間に龍人の細胞を組み込むことで進化した人間。」

ヴァンはハツとした。

あの力、あの姿。

「そうだ。君は1000年前の龍人であり我らの指導者、アルバ・ハートラルの細胞を受け継ぎ進化した人間だ。」
ストライダー

「なん、だと…。」

「アルバ・ハートラルは自分の細胞を残し技術を記した遺跡を創った。我らはそれを発見し《ストライダー》を創り、反戦組織を創った。我らの名は…。」

《SILVERWORLD》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2748d/>

SILVERWORLD 白銀の魔導師

2011年1月2日14時27分発行